または口蓋の形態と関連し，瘻孔の残存も構音障害に影響を及ぼすと考えられた。

22. 千葉県こども病院歯科の12年間の患者動向

甲原玄秋（千葉県こども）

1988年の開院以来の患者動向を調査した。新患2061名，再来19362名であった。年齢構成は7歳未満が1137名（55%）で，血液疾患，心疾患，精神疾患，代謝異常などの合併症が多かった。院外からは歯科，小児科からの紹介が多かった。歯牙疾患が半数を占め，炎症，奇形，外傷などがこれに続いた。全身麻酔治療が過半数を占め，小帯形成術，歯肉切除術などがこれに続いた。

23. 君津中央病院歯口科過去12年間の入院症例の検討

古谷隆則，水町裕義，金沢春幸
（君津中央）

入院患者数は732名で年度平均62名，院外医療機関からの紹介率は58%であった。年齢分布は20歳代が23.6%と最多で，男女比は1.93：1であった。手術件数は全麻276件，局麻410件，合計686件であった。疾患別では外傷性疾患35.0%，嚢胞性疾患23.6%，炎症性疾患20.0%，腫瘍性疾患11.7%の順であった。基礎疾患を有する患者は全体の9.3%で循環器疾患が81%と多かった。

24. 臓器移植や癌治療で免疫低下する患者に対する歯科のガイドライン　－口腔からの感染を防止するために－

小沢憲司，柴田　学，辺蓮　順
菅野　寿，川嵜建治
（福島県医大）

近年，臓器移植や癌治療は高度な治療が行われ，それにより易感染性や免疫低下が起こり，歯科においては菌血症や局所の慢性炎症の再燃の危険性が高くなる。今回我々は，当科に紹介された臓器移植や癌治療患者の内，緑膿菌感染によって敗血症で死亡した1症例を経験した。その経験から今後，該当科とより密接な連絡を取り，歯科ガイドラインに沿ってできる限り早期に歯科疾患を発見，除去，予防していくことが重要と思われた。

25. インプラント埋入に生じた異物迷入の2例

佐々木彰彦，武藤　卓，中西宏志
石部元朗，田中孝佳，石井輝彦
三宅正彦，田中　博
（日大・歯・口外1）

近年，種々のインプラントの開発と術式の簡略化により比較的簡単にインプラント治療が行えるようになり，適応の幅も拡がってきた。しかし，その反面偶発事故も散見されるようになった。今回，われわれは一般開業歯科にてインプラント埋入の際に骨穿孔用ドリルが破折し口底部へ迷入した1例とインプラント体が上顎洞内へ迷入した1例を経験したので若干の考察を含め報告した。

26. 下顎埋伏智歯抜歯の際の皮下気腫の2例

柴田　学，臼渕公敏，柳沼　睦
佐久間知子，長谷川博，川嵜健治
（福島県医大）

入院の上，静脈内鎮静下に下顎埋伏智歯抜歯術を施行し，皮下気腫を生じた2例を経験したので報告した。症例1（29歳の男性），症例2（32歳の女性）ともに，眼窩周囲，頬部，顎下部，鎖骨上にかけて皮下気腫が発生した。術後の処置は入院安静と感染予防のための抗生剤の点滴静注だけとした。3日目頃より捻髪音の触れる範囲が徐々に縮小し，1週間後には完全に消失した。

27. 当科における下顎智歯抜歯後のケア　－特に保冷剤を用いた簡易冷罨法の効果について－

坂口輝子，池谷幸子，中村春美
湊真理子，原田雅弘，高橋喜久雄
（船橋中央）

縫合処置を伴う下顎智歯抜歯患者229名を冷罨法群と非冷罨法群に分け，保冷剤ポリジクロロナトリウムを用いた簡易冷罨法の有効性を検討した。

体温，開口度，腫脹度，鎮痛剤服用回数，日常生活スコアにおいて両群は近似値を示し，統計的有意差はなかった。一方，VASを用いた患者の主観的評価では，腫脹感，開口障害感には信頼度95%で有意差が認められ，冷罨法群が良い結果を得た。